阿蘇 広報あそ

February 2 2024 No.229

特集

みんなの楼門

人がつながり 創りだす 新しい阿蘇
～ONLY ONEの世界へ～
阿蘇市

（上・左下）楼門から拝殿へ歩く参拝客
（中）しめ縄を奉納する会員ら

特集 みんなの楼門

みんなの楼門①

楼門のある日常が戻ってきた

令和５年12月７日、ついに迎えた竣功祭。７年にも及んだ復旧工事の完了を祝い、約260人の工事関係者や地域の人々が式典に参列しました。待ちに待ったシンボルの完成。正月には多くの人が初詣に訪れ、楼門をくぐり新年の誓いを新たにしました。

新年を前にした12月4日の朝。拝殿の前に「一の宮町大注連縄（おおしめなわ）伝承会」の会員が集まっていました。この日は、会員らが制作を続けてきた大しめ縄を奉納する日でした。1番大きい大しめ縄は長さ約7メートル、重さ約150キロ、太さ約1・7メートル。約30分かけて楼門の梁に吊り下げました。「楼門での作業は8年ぶりで難しかった。稲わらが青々として最高のものができた思う」と話す会長の古澤義則さん。着々と迎春の準備が進められていました。

そして迎えた1月1日。小雨が降る中、テレビ中継のためにいつもより一層明るく照らされた楼門の前には多くの人が列を作っていました。日付が変わり楼門の扉が開けられると、ゆっくりと拝殿に向かって人が流れていきました。参拝を終え、楼門と共に写真を撮影する人たちも。8年ぶりに楼門と迎えた新年。境内は新年への希望と笑顔であふれていました。

2024年2月号
public relations magazine No.229

今月の主な内容・CONTENTS

02 特集 みんなの楼門
12 二十歳を祝う集い
14 税の申告受付が始まります
18 Hot Topics
20 8020達成おめでとうございます
21 くらしのインフォメーション
25 お慶び ご寄付
26 人権作文
27 阿蘇医療センター通信 #97
28 まちのわだい
29 ASO田園空間博物館通信 No.103
30 図書館へ行こう！
31 地産地消 Cooking！
31 おたより
32 2月カレンダー

Cover Story
表紙のはなし

阿蘇神社の楼門を下から見上げました。テレビ中継用の光を浴びていつもよりかっこよかったです。

みんなの楼門②

復旧工事が残したもの

楼門の復旧工事には多くの困難が伴いました。
難工事に挑んだ技術者や職人たちの思いを紹介します。

大川畑さん（左）と谷口さん（右）

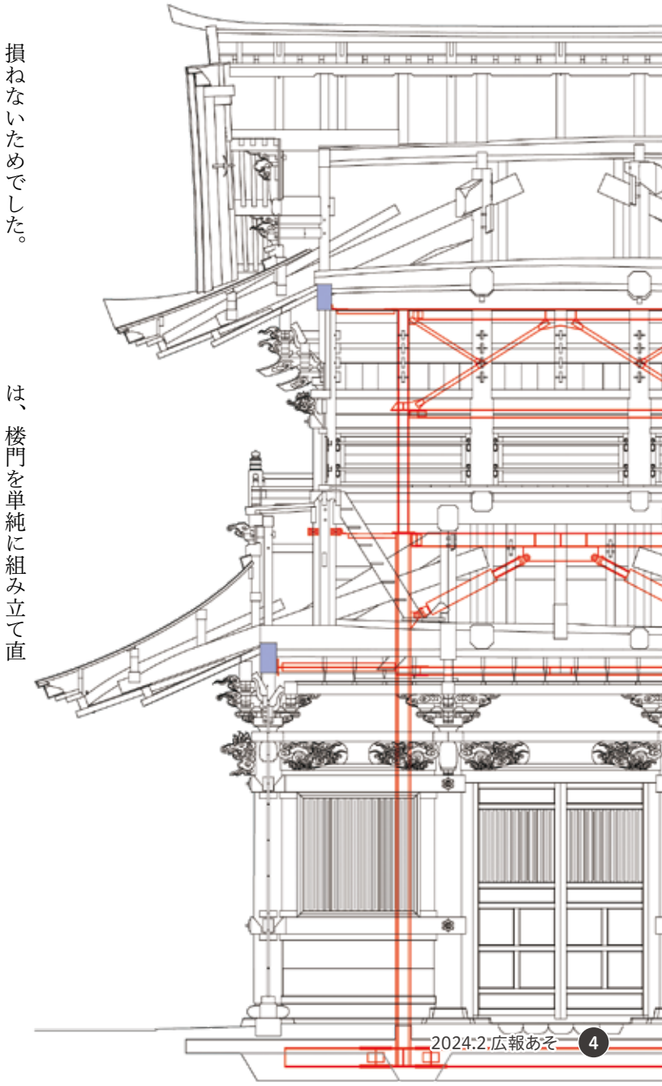
「再利用できる部材はできるだけ使いたいと思いました」。工事の設計や監理を担った文化財建造物保存技術協会の大川畑博文さんはこう復旧工事を振り返りました。一方で、同協会の技術職員谷口征雅さんは「再利用をするとそれぞれの部材の補修箇所が膨大になり、手間がかかります。新たな木材と取り替えた方が早い場合もあります」と話します。それでも再利用にこだわったのは、170年以上も地域に愛され、大事にされてきた地域のシンボルとしての価値を極力損ねないためでした。

破損した柱も、軽くて丈夫という特徴を持つ特殊な繊維「アラミド繊維」を加工した「アラミドロッド」を用いて新しい柱と接合することで再利用しました。木造の文化財建造物修理で初めて使われた技術です。

熊本地震にも耐える楼門を

元の部材を用いて元の姿に戻す一方で、耐震補強も施されることになりました。これは、楼門を単純に組み立て直すだけではなく、参拝者を迎え入れる門としての機能を備えた状態で復旧することになったからです。参拝者の安全を確保するため、熊本地震と同規模の揺れにも耐える耐震性が求められました。

補強は4本の鋼管柱と摩擦ダンパーや鋼材の組み合わせで内側から大きな楼門を支える仕組みです。組立工事ではこれらの補強材と木材が接触しないようお互いを縫うように工事が進められました。



耐震補強も施された（右図赤部分）

軸丸さん（左）と
下村さん（右）

部材の補修作業を
する下村さん

かんなを取り付ける
軸丸さん（左）と
下村さん（右）

楼門は難工事を経てその見た目だけでなく、本来の機能も取り戻しました。黒く光る鋼管柱と歴史を重ねてきた木製の柱。その間を通り抜けて拝殿に向かう参拝者の姿を大川畑さんと谷口さんは誇らしげに見つめました。

阿蘇の職人も大活躍

復旧工事は地元の職人にも支えられながら進められました。完成間際の12月4日午後、ほぼ全ての工事が終わり、式典を待つばかりの楼門に2人の職人がやってきました。最後の作業である、かんぬきの取り付けのためです。2人は大工の下村和男さんと建具職人の軸丸鉄男さん。阿蘇神社楼門の復旧工事に携わった阿蘇市在住の職人です。2人は黙々と作業を進め、3時間程で作業は終了。軸丸さんは「2人でずっと一緒にやってきた。最後も2人で終えられたのはよかった」と話しました。

「車の中に避難している時に見たテレビで楼門の倒壊を知りました」。下村さんは熊本地震の発生直後を振り返りました。夜が明け、家族の反対を押し切って神社へ向かった下村さんの目に飛び込んできたのは楼門の悲惨な姿でした。「涙が止まりませんでした」

悲しい気持ちと同時に「この楼門の復旧には絶対に携わりたい」という気持ちが湧いてきました。復旧工事が始まると何度も現場に出向き、大川畑さんに直談判をしました。熱意が認められた下村さんは、平成28年から復旧工事に参加。近所の温泉で顔なじみだった軸丸さんに加え、別の職人2人も翌年から工事に携わるようになりました。

2人が担当したのは部材の補修作業。倒壊した楼門の解体後、取り出された1万点以上の部材のうち、折れたり傷ついたりした部材を丁寧に修理しました。職人として長い経験を持つ2人でも初めての作業ばかりだったと言います。「毎日が緊張の連続でした」と下村さん。彫刻などの細かい部分を担当した軸丸さんは「彫刻なんかしたことなかった」と振り返りました。それでも、現場の棟梁を務めた福井県の宮大工・与那原幸信さんは2人の技術を高く評価していました。「安心して仕事を任せられた。熱心に仕事に取り組んでいて、いい刺激を受けた」。与那原さんは、阿蘇の次世代にも経験を伝えてほしいと期待を込めました。「子や孫にどんなことをしてきたかを伝えていってほしい」

復旧工事が残したもの

これまで繋がれてきた歴史への敬意と最新の技術、そして地元の職人たちの思い。これらが融合することで、楼門はその魂を変わらぬ形で次世代に引き継ぐことができました。復旧工事は、単なる建物の修復を超えた、地域の誇りを守る行為であったと言えるでしょう。復活を遂げた楼門が市民に残したのは、深い感動と未来への希望でした。

みんなの楼門③

復旧の過程を伝える

復旧工事のようすを伝えた人たちもいました。

2016 11 21

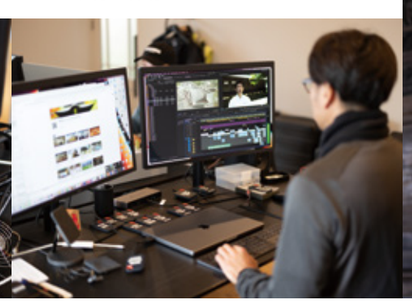
12月7日、楼門復旧工事の完了を祝う竣功祭が行われました。新聞やテレビなど多くの報道が楼門の前でカメラを構える中、少し離れたところでカメラを回す男性の姿がありました。ビデオグラファーの中島昌彦さんです。中島さんは、熊本地震で阿蘇神社が被災してから完成まで復旧工事のようすを動画で記録し、動画配信サイトで公開しています。「撮影するときは報道の人たちのようすも合わせて記録に残すようにしています」。そうすることで、その出来事がどれだけ注目を集めていたかも分かると言います。

中島さんは阿蘇市出身。東京でテレビのディレクターとして働いていました。平成28年4月、帰省してすぐに熊本地震に遭いました。地震直後の神社には、被害の状況を尋ねたりする電話が鳴りやまず、対応する神職も足りていないようすでした。4月24日、中島さんはSNSでの情報発信を神社に提案。前職でSNSを活用していた経験を生かし、被害の状況やどんな支援が必要なのかを発信しました。さらに、動画の撮影と公開も5月から始めました。当初は2週間で東京に戻る予定でしたが、阿蘇神社での情報発信を続けるうちに、今では阿蘇に事務所を構えるまでになりました。

中島さんは復旧工事にも密着し、ボランティアで記録を続けました。難工事に挑む職人たちの思いを知ってほしいとの思いからでした。「倒壊した状態から元の状態に戻すという日本でもあまりない工事。阿蘇のために頑張ってくれた人たちの顔を思い浮かべてほしい」。困難に挑む姿を記録し、その思いが伝わる動画を目指しました。

パソコンで動画の編集作業をする中島さんの足元には大きなHDD（記憶装置）があり、7年に渡って撮影された何千時間分の動画が保存されています。容量はなんと30TB以上。現在は、この膨大な量の素材を90分程度の動画に編集し、公開を目指しているそうです。中島さんの編集作業はまだ続きます。

中島さんが撮影した動画はこちら



神社で撮影する中島さん（右）
パソコンで編集する中島さん(中央)
素材が保存されているHDD（左）

宮本学芸員

宮本学芸員が撮影した動画

2018 4 2

2017 6 28

2016 12 19

2022 1 4

2020 3 2

2019 12 18

2018 7 18

2023 12 7

2023 6 21

2023 3 31

7年間通った楼門

市教育委員会の宮本利邦学芸員は、楼門の復旧工事のようすを同じ位置から撮影し続けました。その期間は平成28年11月1日から令和5年12月7日までの期間。楼門が素屋根で覆われていた期間以外はほぼ毎日撮影に訪れました。撮影した日数は合計で727日。「工事の過程を振り返ることができたらいいなと考えた」。長男が平成30年に生まれたこともあり、熊本地震を知らない世代が増えていることを感じた宮本学芸員。「年月が経つと地震のことも忘れ去られてしまう。動画を見て熊本地震に関心を持ってもらえたらうれしい」と話しました。727枚の写真をまとめた動画は市公式SNSで公開中。

みんなの楼門④

みんなで灯したちょうちん

12月2日から17日にかけて開催された阿蘇復興ちょうちんまつり。阿蘇神社前公園に960個のちょうちんが並べられました。それぞれに企業や個人の名前が記されていました。ちょうちんに込められた思いを聞きました。

寒風が吹き、本格的な冬の訪れを感じさせる天気となった12月2日。神社前公園は寒さも忘れさせるほどの高揚感に包まれていました。「こっちのちょうちんが少しずれとるぞ」。高さ約10メートルのやぐらを見上げながら叫ぶ声が聞こえてきました。この日は阿蘇復興ちょうちん祭点灯式の日。実行委員会事務局のスタッフが最後の準備に追われていました。

祭りは犠牲者の鎮魂と復興への希望の灯りとしてちょうちんに光を灯すもので、阿蘇神社の復旧完了に合わせて企画されました。やぐらには祭りに協賛した個人名や会社名を記したちょうちん960個が並べられました。

山部さん

準備が終わり、辺りも暗くなるといよいよ点灯の時間。合図に合わせて一斉に点灯したちょうちんが夜空を明るく彩りました。12月9日にはキッチンカーが来場。花火も打ち上げられました。17日にはバルーンを空に飛ばすイベントもあり、17日までの期間中に約1万3千人が来場。「想定の倍以上の人数。初めてのイベントで不安もあったが、多くの人に来ていただきありがたかった」と話す実行委員会委員長の山部雄作さん。「それだけ楼門の復興が地域の人に待ち望まれていたということでしょう」

山部さんら主催者がこだわったのは、市民自らが祭りに携わることでした。ちょうちんは全てスタッフと阿蘇中央高校生や地域のボランティアが取り付け、打上花火の翌日には早朝から田んぼの清掃も行いました。「祭りをみんなで一つ一つ作り上げながら、大変なこともいろいろな人と共有できたらうれしい」と話す山部さん。祭りの運営を通して仲間たちとの絆は固くなったと言います。今後はさらに多くの市民を巻き込みながら祭りを続け、シンボルである楼門を媒介とした阿蘇全体のつながりを強くしていきたいと考えています。

第2回 阿蘇ちょうちん祭 開催決定

期間 4月6日(土)～4月16日(火)　点灯時間／日没～午後9時

会場／一の宮町中央駐車場「神社前公園」および周辺

復興のあかり協賛追加募集

市民の皆さま、企業の皆さまと共に復興のあかりを灯しませんか？ **1万円／1口**

詳しくはこちら

主　催：阿蘇復興祭実行委員会（事務局代表）阿蘇市商工会一の宮支所 電　話／0967-22-0789

能登半島地震への支援

1月24日、市民課の松本良一主任が被災地支援の第1陣として輪島市に派遣されました。県と県内市町村との合同チームの一員として31日まで住宅被害の認定調査などの業務にあたりました。

1月20日、阿蘇医療センターのDMAT（災害派遣医療チーム）隊が石川県穴水町に派遣されました。医師、看護師、業務調整員の計5人で編成。26日まで活動しました。

市役所本庁・内牧支所・波野支所に義援金箱を設置。1月12日までに計405,583円の募金が集まりました。15日に日本赤十字社を通じて送金。義援金は現在も上記3カ所で受け付けています。

みんなの楼門⑤ あの日を忘れない

看板を取り外す市長

阿蘇神社の楼門復旧工事の完了により、災害復旧や災害支援事業がおおむね完了しました。これを受けて昨年12月28日、市役所玄関前に掲げてあった「阿蘇市災害復旧･復興対策本部」の看板を撤去しました。しかし、これで熊本地震は終わりではありません。あの経験を忘れることなく、災害に強いまちづくりに役立てていくことがこれからの私たちの使命の1つです。

もう1つ忘れてはならないのは、熊本地震からの復旧・復興は全国からの支えがなければなしえなかったということ。

1月1日に発生した能登半島地震は石川県を中心に甚大な被害をもたらしました。この地震で今日も多くの人が苦しく辛い日々を過ごしています。7年前に多くの支えを受けた私たちができることは何でしょうか。。